

## 平成17年度 マンモグラフィ乳がん検診実施報告および結果分析

○川崎美和 中村さつき 成合泰子 伊福浩水 湯田敏行 (宮崎県健康づくり協会)

## 〔はじめに〕

食生活やライフスタイルの変化から本邦でも年々乳がんの罹患率および死亡率は増加している。現在、年間罹患数は約35,000人で、平成8年以降、女性の乳がん罹患率において第1位を占めている。また平成16年の乳がん死亡者数は10,609人と初めて1万人を越え、宮崎県においても92名の乳がん死亡が報告されている。特に本邦では、40歳代後半という社会や家族にとって重要な時期に乳がんが最も多く発見されているため、乳がん対策は急ぐべき課題である。

平成17年4月、新規事業としてマンモグラフィ(以下MMG)乳がん検診車が宮崎県健康づくり協会に導入された。平成17年度当協会では実施されたMMG乳がん検診の実施報告および結果について分析したので報告する。

## 〔対象〕

平成17年度の総受診者は2,579名であり、内訳は住民検診2,503名(7市町村)、職域検診76名であった。MMG乳がん検診対象者は国の指針では40歳以上となっているが、市町村の意向や個人の希望により24歳から84歳までの方が受診された(表1)。

## 〔撮影方法〕

MMG撮影は内外斜位、頭尾方向の2方向撮影または内外斜位の1方向撮影で行った。撮影はMMG検診精度管理中央委員会(以下精中委)が行う技術認定をもつ女性診療放射線技師が行った。国の指針では40歳代で2方向撮影、50歳以上で内外斜位の1方向撮影となっているが、市町村の意向により4市町村では全員2方向撮影を行った。

## 〔読影〕

読影は協会が設置するMMG読影委員会(検診MMG読影認定医師10名で構成)が二重読影を行い、カテゴリー3以上を要精密とし、医療機関に紹介した。

## 〔結果〕

総受診者数2,579名の中で要精検者は231名で、要精検率は9.0%であった(表1)。要精検率を平成17年7月から12月までの受診者1,738名と平成18年1月から3月までの受診者841名と比較すると、前者では9.9%、後者では7.0%であった(表2)。また、乳房構成は脂肪性382名(14.8%)、乳腺散在1,081名(41.9%)、不均一高濃度976名(37.8%)、高濃度140名(5.4%)であった(表3)。

また追跡調査は平成17年12月までの受診者1,738名の内、要精検者172名を対象に、平成18年3月までに精密結果の返信があった149例について行った。精検受診率は86.6%で、手術施行済みの乳がん確定者は9名、乳がん発見率は0.52%であった。乳がん以外の疾患としては、良性疾患(う胞、乳腺症、良性腫瘍)が大半を占めている(表4)。乳がん確定者は45歳~80歳であり、9名中8名は早期がん(stage0~stage I)であった。また全例において乳房温存手術が施行された(表5)。

表1. 平成17年度マンモグラフィ検診実績  
(H17年7月~H18年3月)

	受診者	要精検者数	要精検率(%)
20~29歳	7	0	0
30~39歳	103	9	8.7
40~49歳	449	38	8.5
50~59歳	663	72	10.9
60~69歳	798	68	8.5
70~79歳	524	41	7.8
80~89歳	35	3	8.6
計	2,579	231	9.0

(受診者数2,579名 7市町村2,503名 職域76名)

表2. 要精検率(平成17年7月~12月と平成18年1月~3月)

	受診者	要精検者数	要精検率(%)
7月~12月	1,738	172	9.9
1月~3月	841	59	7.0

表3. 乳房構成内訳(2,579症例)

乳房構成	数	割合(%)
脂肪性	382名	14.8
乳腺散在	1,081名	41.9
不均一高濃度	976名	37.8
高濃度	140名	5.4
高濃度+不均一高濃度	1,116名	43.3

表4. 平成17年度 追跡調査報告

(対象者:平成17年12月末日までの要精密者, 期間:平成18年3月末日まで)

受診者数	1,738名	要精密者数	172名
精検結果報告	149件	精検受診率	86.6%
乳がん確定者	9件	乳がん発見率	0.52%

結果報告内訳(149件)

乳がん	9件	乳腺症	27件
のう胞	25件	異常なし	55件
良性腫瘍	16件	不明	3件
その他	14件		

表5. 乳がん確定者の分析

症例番号	手術術式	stage分類	病理組織診断
1	乳房温存	0	非浸潤性乳管がん
2	乳房温存	I	粘液がん
3	乳房温存	0	非浸潤性乳管がん
4	乳房温存	II	硬がん
5	乳房温存	I	硬がん
6	乳房温存	0	非浸潤性乳管がん
7	乳房温存	I	乳頭腺管がん
8	乳房温存	I	充実腺管がん
9	乳房温存	I	乳頭腺管がん

表6. 協会マンモグラフィ検診成績と他県の比較

	当協会	徳島1)	宮城2)	茨城3)
受診者数	1,738	17,956	12,515	17,193
要精検率(%)	9.9	6.9	3.6	3.3
乳がん確定者数	9	53	36	41
乳がん発見率(%)	0.52	0.29	0.28	0.24

1)Morimoto et al: Anticancer Res 20, 3689, 2000

2)Ohuchi et al: Jpn J Cancer Res 86, 501, 1995

3)Tsunoda: personal communication

資料:乳がん検診にすぐに役立つ マンモグラム アトラスより引用

### [考察]

協会初年度のMMG乳がん検診受診者数は2,579名で、要精検率は9.0%とやや高値であったが、平成17年7月から12月までの受診者と平成18年1月から3月までの受診者の要精検率を比較すると、9.9%から7.0%に減少している。今後、検診でのカテゴリ判定と精検結果を照らし合わせることで読影力をさらに向上させ、要精検率が低下することが期待される。

MMG読影において乳房構成は大きな要素である。今回の分析では、所見が発見しやすい脂肪性および乳腺散在の乳房が全体の56.7%、不均一高濃度の乳房が37.8%、所見の識別が困難な高濃度の乳房が5.4%であった。高濃度の乳房のうち、MMGで読影困難であり、超音波検査を勧めた症例が63件あった。今後平成18年度から当協会に導入される乳房超音波検査を併用することで受診者の利便性が良くなると考えられる。

MMG受診者は2,579名と当初予定よりも少ない

なか、乳がん確定者が9名で、乳がん発見率では他施設にまさっており(表6)、そのうち8名が早期がんで、全例において乳房温存手術が施行された。また乳がん確定者のうち、3名は精密医療機関での視触診で異常なしと判定されており、視触診のみの従来の検診では見落とされている可能性が高いと考えられ、MMG検診の重要性が分かる。

欧米では成人女性の8人に1人、また日本でも22人~23人に1人、さらに2015年には20人に1人が、一生の内に乳がんにかかると予測されている。欧米では罹患率が増加しているにもかかわらず、死亡率は低下している。この要因として、欧米のMMG検診受診率が対象者の7割以上であり、早期に乳がんが発見されていることが挙げられる。このようなことから、乳がん死亡率を下げるためにはMMGを併用した乳がん検診の普及と受診率向上が必要である。

今回受診者の多くは初めてMMG検査を受けていた。MMG検査は羞恥心と乳房圧迫による痛み、さらにはX線被ばくの不安も伴うため、受診者の検査に対する理解をより深めてもらう必要性があり、そのことが受診率向上にもつながっていくと感じた。

### [まとめ]

平成17年度に新規導入されたMMG乳がん検診により9名の乳がん患者(内8名は早期)を発見でき、全例において乳房温存手術が施行された。

今後MMG併用による乳がん検診の普及により宮崎県下の乳がん死亡率の低下が期待できると考えられる。(なお、平成17年度の追跡調査が途中なため、乳がん確定者が増える可能性がある。)

### <参考文献>

- 厚生労働省平成16年度人口動態統計および宮崎県衛生統計年報
- 乳癌取り扱い規約 第15版, 金原出版, 2004年
- マンモグラフィガイドライン第2版, 医学書院, 2005年
- 森本忠興編著, 乳癌検診にすぐに役立つマンモグラムアトラス 改訂第2版, 永井書店, 2005年